岡山県特別支援学校における
知的障害のある児童生徒の
指導内容表

令和２年３月

岡山県特別支援学校長会
岡山県教育庁特別支援教育課

岡山県特別支援学校における
知的障害のある児童生徒の
指導内容表目次

はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅰ　活用の仕方 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅱ　各教科等

1　総則 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
2　生活 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
3　国語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
4　社会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
5　算数・数学 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
6　理科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108
7　音楽 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
8　図画工作・美術 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 132
9　体育・保健体育 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142
10　職業・家庭（職業）（家庭） ・・・・・・・・・・・ 168
11　外国語活動・外国語 ・・・・・・・・・・・・・・・ 188
12　情報 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 198
13　流通・サービス ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 204
14　特別の教科　道徳 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 208
15　自立活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 222

委員名簿

はじめに

新学習指導要領においては、育成を目指してきた「生きる力」を改めて捉え直し、子供たちが未来社会を切り拓いていくために必要な資質・能力を一層確実に育成するため、全ての教科等の目標及び内容が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理されました。これにより、自立と社会参加という特別支援教育の理念でもある「生きる力」を具現化し、教育課程によりその育成を図ることになります。そのためには、教育課程に基づき、組織的・計画的に学校の教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントの推進が必要です。

本県においては、平成24年に「岡山県特別支援教育教育課程指導資料」を作成し、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の子供たちの自立と社会参加に向けて、育成すべき資質・能力（何ができるようになるか）を明確にし、学習指導要領の教科等に示す内容（何を学ぶか）を考えることで、適切な教育課程の編成に向けて取り組んできました。また、平成30年には「授業づくりハンドブック」を作成し、資質・能力を育むための授業づくり（どのように学ぶか、何が身に付いたか）について、学習指導案と学習評価の考え方を県内全ての特別支援学校教職員間で共有し、授業づくりに取り組んできました。

このたびの資料は、「岡山県特別支援教育教育課程指導資料」を新学習指導要領の趣旨に基づいて再整理したものです。本資料が、本県の子供たちの現状と未来を見据えた学びの地図となり、日々の授業づくりや授業改善に生かされるとともに、これまでの教育課程編成の在り方を再考し、教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出すカリキュラム・マネジメントの実現につながり、第３次岡山県特別支援教育推進プランにおいても重点課題としている特別支援学校教職員の専門性向上の一助となるものと期待しています。

最後になりましたが、この資料作成に際して教科等の内容をまとめ、原稿の執筆をしてくださった委員の方々に心より感謝申し上げます。

令和２年３月

岡山県特別支援学校長会
会長（岡山西支援学校）　平賀　和治

岡山県教育庁特別支援教育課
課長　中村　　誉

Ⅰ　活用の仕方

活用の仕方

指導内容表は，何のために，いつ，活用するのでしょう。

（１）指導内容表の作成に当たって

知的障害のある児童生徒は，発達の段階や認知の特性，学習上の困難さなど，一人一人に違いがあり，授業の中で習得する内容にばらつきが出てくることが考えられます。また，集団で学ぶ場合，一人一人に違いがある分，個々の児童生徒の各教科の目標や内容を落とさず指導することができにくく，学ぶ必要がある多くの内容を取り扱えなくなる可能性があるとも言えます。

今回，改訂された学習指導要領では，それらのことを踏まえて，知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科の目標や内容について，細かく示されました。それを受けて，私たちは，その内容を十分に理解し，障害の状態に応じ，きめ細やかな指導を行うことが必要となってきました。

そのような背景から，この指導内容表は，「授業づくりハンドブック（平成 30 年３月　岡山県特別支援学校長会　岡山県教育庁特別支援教育課）」と合わせて，日々の授業づくり，授業改善に役立つ資料として，作成しています。

（２）指導内容表の活用に向けて

指導内容表は，下記の目的を踏まえた上で活用されると，児童生徒にとって，根拠のある確かな学びができると同時に，先生方にとっても，教育活動の質の向上を図ることができるものになると考えています。

＜指導内容表の活用の目的＞

- **○　各教科の目標及び取り扱うすべての内容を踏まえて，指導の見通しをもつことができるように**
- **○　学習指導要領に示されている内容の中から，必要な内容を落とさず取り扱うことができるように**
- **○　日々の授業づくりで，根拠のある実践を重ねることができているかを確認することができるように**

（３）活用する場面

児童生徒がもっている力，付けてきた力を把握し，継続して学習状況を確認していくために，必要なときにすぐ開くことができるように手元に置いておきましょう。各教科で，どの段階の学習を行うのが適当かを考えるとき，いきなり，集団の実態を捉えようとするのではなく，個々の児童生徒の力を丁寧に捉え，それを元に，集団となったときに共通する必要な学習内容を導き出したり学んだことを評価したりするという考え方で，活用していきましょう。

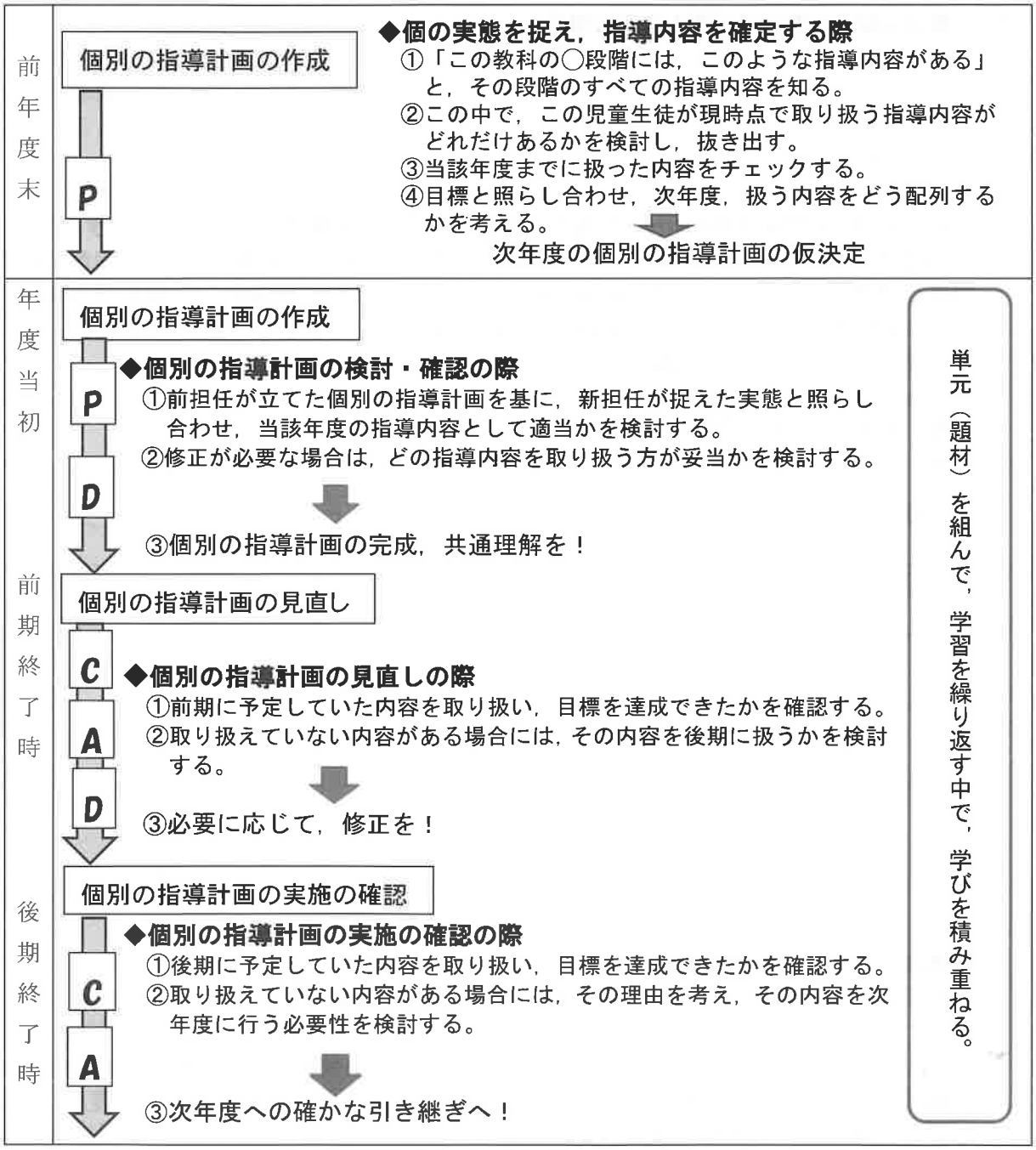
具体的には，下記の場面で活用することが多いと考えています。

①年間指導計画の作成時
②個別の指導計画の作成時
③一単元（題材）の授業の集団及び個別の実態把握や単元計画の作成時
④単元及び学期，年間の評価時

個別の指導計画の作成時に，どのように指導内容表を使うのでしょう。

私たちは年度当初，児童生徒の各教科の指導目標や指導内容を設定するに当たり，前年度までに習得した内容や設定した目標の到達点等，学習状況を把握する作業を行います。この**一連の過程で，前年度までに目標達成ができた内容は何なのか，新たな課題は何で，どのような指導目標，指導内容を設定していかなければならないのか等，教科ごとに丁寧に検討を行います。この検討を経て整理をされたものが個別の指導計画に表記され，1 年間の指導の指標となります。**指導内容表は，年度当初だけでなく，年度途中の個別の指導計画の見直し時にも同じように活用していくことができます。

前年度末に始まる個別の指導計画の作成時から，中間の見直し，年間の振り返りまでの一連の活動において，「根拠のある指導」を行うために，今回作成をした指導内容表をどのように活用していくのか，以下に示した図の順序に沿って説明していくことにします。



＜図　個別の指導計画の作成手順（ＰＤＣＡサイクルにのっとって）

活用の仕方

図のように，個別の指導計画の作成時には，まず，複数の教員で各児童生徒の実態把握を的確に行うことが重要です。新たに転入学してきた児童生徒の場合には，前所属先からの引き継ぎ事項を参考にしますが，進級の場合には，前担任が前年度の実態や学習の成果をどのように考えていたかを把握することから始まります。そして，引き継いだ個別の指導計画を元に，現担任が捉えた実態と照らし合わせながら，指導内容表を見て，取り扱える内容を確認し，個別の指導計画を作成していきます。前期，後期の終了時には，再度，内容を確かめるために，指導内容表を活用します。

個々の児童生徒の実態を踏まえて，妥当な内容を選定し，根拠のある指導目標を立てることができるよう，指導内容表を活用していきましょう。

個別の指導計画を立てる際に，どのようなことに気を付けるとよいでしょう。

（１）児童生徒の各教科の段階と内容の確認

まず，個々の児童生徒の実態を踏まえて，その児童生徒に合うと思われる段階のおおよその内容のすべてを把握しましょう。児童生徒によっては，複数の段階にまたがる実態の場合もあるので，その時には，中心となる段階の前後の内容も知っておきましょう。ここでは，小学部の算数を例にとって考えてみます。

算数には，「数量の基礎（小１段階のみ）」「数と計算」「図形」「測定」「データの活用」という５つの領域があります。学習指導要領には，それぞれの領域に関して，細かい指導内容が設定されています。それを具体的に一覧にしたものが指導内容表の各教科等編で示す内容になっていますので，よく読んでみましょう。各教科で，段階別にどのような内容が挙げられているかを把握しておくことが大切です。

参考：＜表１　算数　小学部の内容＞

内　容	小１段階	小２段階	小３段階
数量の基礎	ア　具体物に関わる数学的活動 イ　ものとものとの対応		
数と計算	ア　数えることの基礎	ア 10までの数	ア 100までの整数 イ 整数の加法，減法
図形	ア　ものの類別や分類	ア　ものの分類 イ　身の回りにあるものの形	ア 身の回りのものの形 イ 角の大きさ
測定	ア　具体物のもつ大きさ	ア 二つの量の大きさ	ア 身の回りのものの量の単位と測定 イ 時刻や時間
データの活用		ア　ものの分類 イ　同等と多少 ウ ○×を用いた表	ア 絵や図，記号での置き換え

※詳細は，算数・数学編を参照

（２）当該年度に取り扱う内容の選定

把握した段階の内容の中で，**当該年度に取り扱うのが適切だと思われる内容を選定**しましょう。選定の際には，「児童生徒の現在の実態」「前年度からの指導の一貫性や連続性」「適時性」「児童生徒の興味関心」等を考慮して考えましょう。**小学部では６年間，中学部では３年間を見通して，扱う内容が偏らないように，また，その児童生徒の実態から考えて，扱わなければならない内容をすべて扱うように**，毎年，あるいは半期ごとに指導内容表を活用して，確認するようにしましょう。

学習指導要領で定められている内容は，すべての児童生徒に対して扱わなければならないものですが，その段階は，個々の実態によって異なると考えられます。

例えば前述した算数の５つの内容について，個々の児童生徒に対して，扱わなくてよい内容はなく，目標とする段階が異なるだけであると考えます。半年ごと，あるいは１年ごとに学習状況を確認し，進み具合によって，次の期間に扱う内容を見直しながら，６年間，または３年間で網羅して取り組んでいくことが大切です。

参考：＜表２　算数　小学部の内容　小学部３年生Ａさんの例＞

内　容	小１段階	小２段階	小３段階
数量の基礎	ア　具体物に関わる数学的活動 イ　ものとものとの対応		
数と計算	ア　数えることの基礎	ア　10までの数	ア　100までの整数 イ　整数の加法，減法
図形	ア　ものの類別や分類	ア　ものの分類 イ　身の回りにあるものの形	ア　身の回りのものの形 イ　角の大きさ
測定	ア　具体物のもつ大きさ	ア　二つの量の大きさ	ア　身の回りのものの量の単位と測定 イ　時刻や時間
データの活用		ア　ものの分類 イ　同等と多少 ウ　○×を用いた表	ア　絵や図，記号での置き換え

□ これまでに習得した内容　　○ その年に扱うと選定した内容

【コラム１：学習の習得が緩やかな児童生徒にとっての扱う内容は？】

学習の習得が緩やかな児童生徒にとっては，複数年度に渡って，１段階の内容を扱うということもあります。その場合には，毎年，単純に繰り返して１段階の内容を扱えば良いのではなく，**１段階の内容を分析的に考え，学習の展開や教材教具の提示の仕方等をどのように工夫すれば，１段階の学習の目標に迫ることができるかを考える**必要があります。指導内容表に表記している１段階の内容を吟味し，取り上げる内容を細分化して考え，具体化することが大切です。

また，このような児童生徒の場合，中学部では小学部で，高等部では中学部で培った力との連続性や一貫性を考え，前学部の内容の続きから扱うようにします。**生徒が無理なく主体的に学習に取り組むことができるように，中学部・高等部３年間で取り扱える内容の範囲を個々に想定する**必要があります。

（３）指導目標の設定，内容の選定に当たって

指導目標を設定し，内容を選定する際には，**「段階を追って獲得する新たな力（タテに伸びる力）」と「同じ段階の内容でも充実・定着を図る力（ヨコに広がる力」の獲得という２つの面がある**と考えましょう。個々の児童生徒にとって「主体的・対話的で深い学び」が実現し，確かな学びができるように，実態を踏まえて，どのような力を付けていきたいかを考えて，指導目標の設定や内容の選定をしていきましょう。

（４）選定した内容の指導場面を考える

各教科の一覧に示した内容には，教科別の指導で行う方が効果的な内容と，教科等を合わせた指導の中で行う方が効果的な内容があります。**選定した内容をどの授業を中心**

に扱うのが適切かを考えて，各教科や各教科等を合わせた指導の中に位置付けていきましょう。

【コラム2：教科等を合わせた指導における指導内容の扱いは？】

各教科で扱う内容は，「教科別の指導の時間に扱う内容」であると同時に，生活単元学習や作業学習のような「各教科等を合わせた指導の時間に結果的に身に付ける内容」でもあります。しかしながら，「各教科等を合わせた指導」の目標として，教科ごとの目標をそのまま列記することはないので，教科の視点で見たときに，「何を学ぶか」があいまいになってしまうことがあります。そのようなことがないように，**「各教科等を合わせた指導」では，それぞれの単元の展開を工夫し，取りこぼしのないように教科の内容を扱っているかを，単元計画作成時や授業後の評価時に個別の指導計画を確認**していくことが大切です。

（5）個別の指導計画に，教科の目標を表記する

毎年の教科の目標は，取り扱おうと計画しているすべての内容について，指導目標を立てて，実践していきましょう。指導目標は，必ずしも，観点別に分けて設定できるとは限りませんが，**３観点を踏まえて設定するのが望ましいと考えています。**

個別の指導計画には，紙面の制限があるため，すべてを記述することは難しいと考えられます。そのため，その年度の重点と考える目標に絞って記述するようにならざるをえない状況があります。

したがって，**個別の指導計画に記載した指導目標以外にも，その年に設定している目標が多くあることを心に留めておき，日々の学習の中で意識して取り組んでいくことが大切**です。

（6）学習状況を把握する

個別の指導計画や年間指導計画を複数年度並べて見たときに，その児童生徒の学習状況（どの時期にどのような資質・能力が育ってきているか）が分かるかどうかを確認していきましょう。学習指導要領では，年度当初に計画していたことを確実に実践でき，児童生徒が「何を学んだか」が明確になっていることが求められています。日々の指導では，継続性，一貫性をもって，積み重ねていくことを心掛けていきましょう。

確実に力が付いてきているかを確かめるには，毎時間の授業での評価，単元ごとの評価，半期ごとの評価，さらに年間の評価をこまめに積み重ねて行うことが大切になってきます。

【コラム3：年間指導計画の作成におけるポイントは？】

年間指導計画も，個別の指導計画と同様の考え方で作成していくと，扱う内容が偏らず，「カリキュラム・マネジメント」の実現を図ることができ，教育活動の質の向上につながっていくと考えられます。個別の指導計画の作成手順や気を付けるポイントを参考にして，年度ごと，あるいは複数年度に渡って計画的に作成していくことで，指導者間で指導の根拠を共有でき，役に立つものになるでしょう。具体的に言うと，一つ一つの教科について，前年度の踏襲に終始せず，小学部６年間，中学部３年間，高等部３年間の中で，その集団が取り扱うべき内容をまんべんなく取り扱うことができているかを確認しながら，年間指導計画を作成していくことを心掛けたいということです。

このように，年間指導計画の作成においても**ＰＤＣＡサイクルに位置付けて，扱う内容を明確にし，年間指導計画が授業改善につながるツールになるよう，工夫**していきましょう。

一単位時間の授業計画を立てる際には，どのように活用するのでしょう。

一単位時間の授業計画の際には，次の図４で示しているように，個々及び集団の児童生徒の実態を整理するときや，実践の評価をするときに，指導内容表を確認して，扱う内容を明確にしながら進めていきます。
（「授業づくりハンドブック」Ｐ８～１２も合わせて，参考にしてください。）

＜一単位時間の授業計画時の活用のイメージ（教科別の指導の場合）＞

１）対象となる児童生徒集団の確認

２）取り上げる教科の年間指導計画
年間指導計画の中で，この時期にはこの内容を扱う予定である。

３）既習事項の確認
これまでにこのような内容を扱ってきた。
これまでの学習で，このような力が身に付いている集団だと捉えている。

指導内容表に照らし合わせると，個々の児童生徒は，ここで扱う内容の何段階の実態だと言えるか？

４）個の実態の整理
Ａさん，Ｂさん，Ｃさん，Ｄさん　それぞれのこの教科の実態を，３観点を踏まえながら整理すると…。

集団の実態としてまとめると

５）集団の実態の整理
現在のこの集団の実態は？
この教科について，集団の実態を３観点で整理する。
「取り扱う内容に関する知識及び技能は？」
「取り扱う内容に関する思考力・判断力・表現力等は？」
「取り扱う内容に関する学びに向かう力・人間性等は？」

この内容について，何段階から何段階の児童生徒がいる集団だと言えるか？

６）単元目標と評価規準の設定（集団）
３観点に分けて，単元目標と評価規準を明確に設定する。

個の目標を立てる際には，「個別の指導計画」で立てた目標に迫ることができているかを確認する。

７）単元計画の設定
この学習をどのような展開で，何時間掛けて行うと，単元目標を達成できるか。

８）１時間の学習展開の設定
この学習をどのような展開で行うと，本時の目標を達成できるか。

毎　時　間　の　実　践

９）本時・本単元の評価
評価規準・評価基準に照らし合わせ，何を学べたかを確認する。

個々の児童生徒が学んだ内容の確認をしているか？
この単元で設定した目標を達成することができたか？
指導内容に照らし合わせると，どの内容がどの程度身に付いたといえるか？

活用の仕方

※　各教科等を合わせた指導の場合には，単元計画を立てる段階で，教科の視点から，内容の検討・確認が必要です。指導内容表は，単元計画を立てたときに，教科としては，どのような内容を盛り込んでいるかを確認するツールとして活用することができます。**単元を進める中で，「教科のどの内容を押さえることができるか」「この単元で学んでほしい内容をもらさず，取り上げることができているか」を確認することを忘れないようにしましょう。**

一単位時間の授業計画を立てる際には，どのように活用するのかを具体例を挙げて考えていきましょう。

（※　ここでの項目番号は，前ページの番号と合わせており，学習指導案に記載する項目番号とは異なります。）

例　小学部４年　算数科「いろいろな物の長さを比べてみよう」

１）　対象となる集団　　小学部４年生　男子２名　女子２名　計４名

２）　算数科の年間指導計画　９月に「測定」の２段階の内容を扱うことにしている。

３）　既習事項の確認

・２枚の絵や簡単な図形の絵合わせ
・色や形に注目した分類（3×3のマトリックス）
・１対１対応　３までの数を数えること
・「食べる物」「乗る物」など，同じ用途の物集め
・重さ比べ

４）　個の実態の整理

	「知識及び技能」　「思考力・判断力・表現力等」　「学びに向かう力・人間性等」を踏まえて
A	具体物を触って，「重たい」「大きい」などという言葉を使うことができる。 ２つの物を比べて，重い方，長い方，大きい方，多い方を感覚的に選ぶ。 仲間集めや絵合わせなどの学習に興味をもち，進んで取り組もうとする。
B	異なる種類の物でも，「重い」「軽い」，「長い」「短い」等の言葉を使って区別することができる。 重さや長さを比べるとき，「〇〇と同じ」や「何の何個分」という表し方ができることがある。 すぐに答えが出ない課題のときにも，考える手掛かりがあると，試行錯誤して答えを導き出そうとする。
C	違いの大きい物であれば，２つを比べ，「重い」「軽い」「長い」「短い」などと区別することができる。 同じ種類の物であれば，重い方や長い方を選ぶことができるが，異なる物では，迷うことがある。 見たり直接的に操作したりすることができる学習であれば，自分から取り組もうとする。
D	物によって重さや長さに違いがあることに気付いており，２つの大小の物を分けることができる。 持ち上げたり触れたりするような直接的な操作があると，重い方や大きい方を選ぶことができる。 友達の活動を見て，課題への取り組み方が分かり，同じようにやってみようとする。

学習前の力を指導内容表で確かめると

	指導内容表で確かめた段階
A	（測定）　小２段階程度
B	（測定）　小２～小３段階程度
C	（測定）　小２段階程度
D	（測定）　小１段階程度

５）集団の実態の整理

・　物には重さや長さなどの量の違いがあることが分かり，違いの大きいものであれば２つの物を比べたり対応した言葉を使って区別したりすることができる児童が多い。

→（知識及び技能）測定　小学部２段階

・　直接的に持ち上げたり操作したりして２つの物の重さや長さを比較することができる。感覚的に捉えている児童が多いが，中には，基準となるものを使って，相対的に比べようとする児童もいる。３つ以上の物の比較になると，あいまいになる。

→（思考力・判断力・表現力等）測定　小学部２～３段階

・　直接操作をすることができる学習には意欲的に取り組み，友達の活動や教師からのヒントを手掛かりに取り組もうとする児童が多いが，課題の理解ができないと，活動が滞りがちになる。

→（学びに向かう力・人間性等）数学的活動　小学部１～３段階

個別の実態からおおよその共通する集団の実態を整理し，本単元で取り上げる指導内容を導き出せるようにします。

６）単元目標の設定

・　身の回りにある物の長さの違いに注目し，２つの物の長さを測ったり比べたりすることができる。　**→（知識及び技能）測定　小学部の２段階に焦点を当てた目標**

・　長さを正確に測ったり比べたりする方法があることに気付き，端をそろえたりまっすぐに伸ばしたりして長さを比べたり，「長い」「短い」という用語を用いて表現したりすることができる。

→（思考力・判断力・表現力等）測定　小学部２～３段階の始めに焦点を当てた目標

・　長さを測ることや比べることに関心をもち，友達と一緒に課題をやり遂げることに楽しさを感じながら，自分から長さ調べの学習に取り組もうとすることができる。

→（学びに向かう力・人間性等）測定　小学部２段階に焦点を当てた目標

単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・　身の回りにある物の長さに注目し，違いがあることに気付いている。 ・　２つの物の長さを測ったり比べたりすることができている。	・　長さを正確に測ったり比べたりする方法を自分で考えている。 ・　「長い」「短い」という用語を用いて，長さを表現している。	・　長さを測ったり比べたりする学習に自分から取り組んでいる。 ・　友達の活動をヒントにしたり，やり取りしたりしながら，意欲的に課題に取り組んでいる。

実態を踏まえ，どの段階に焦点を当てているかを明確にし，この単元でどのような力を付けたいかを考えて，３観点で目標を整理しましょう。評価規準も，単元目標に対応させて，この段階で押さえたいことが分かるように記述することが大切です。

７）単元計画　（全１０時間　本時６／１０時間）

次	時	活動内容	評価の観点		
			知・技	思・判・表	主体的
一	1	長いかな，短いかな	○		○
二	1	長い物を探そう	○		○
	2	短い物を探そう	○	○	
三	1．2	端をそろえて比べよう	○	○	
	3．4	まっすぐに伸ばして比べよう		○	○
四	1～3	長い順に並べよう		○	○

単元目標に迫るためには，児童が課題意識をもてるような学習を考え，必要な内容を取り上げることができる展開や時間数になっていることが大切です。

8）本時の学習展開　（第三次第３時）

目標	全体	・　提示された２本のひもの長さの比較の仕方を考え，比べて見せたり長い方を選んだ理由を説明したりすることができる。(思考力・判断力・表現力等) ・　提示されたひもの長さ調べに関心をもち，友達とやり取りしながら操作を通して長い方を選ぼうとすることができる。(学びに向かう力・人間性等)		
	個別	A	B	C
		・　提示された２本のひもの端をそろえた状態でまっすぐに伸ばして比べることに気付き，自分で長い方を選ぶことができる。 ・　自分から長さ調べの課題に取り組み，友達の活動を手掛かりにしながら，自分で長い方を選ぼうとすることができる。	・　提示された２本のひもを基準となる物を使って比べる方法を考え，長い方を選んだ理由を自分なりに説明することができる。 ・　友達の考えを聞いたり，自分が考えた長さを比べる方法を友達に伝わるようにやってみせたりしようとすることができる。	
学習活動		教師の支援及び指導上の配慮事項		
1				

焦点を当てる段階を意識しながら，本時で達成してほしい目標を具体的に記述します。特に，個別の目標に関しては，実態を踏まえて取り上げる段階の中でどのような力を付けようとしているのかが分かるように，書き分けるようにしましょう。

9）本時・本単元の評価

本時の評価基準

	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	・　提示された２本のひもを端を揃えた状態で真っ直ぐに伸ばして比べている。 ・　やってみたことを手掛かりにして，複数回，自分で長い方を選ぶことができている。	・　自分から２本のひもを操作して，長さ調べの課題に取り組もうとしている。 ・　友達の活動にも注目し，それを手掛かりにして，自分で長い方を選ぼうとしている。
B	・「基準となる物が何個分だから，こちらの方が長い」と分かるような操作をしている。 ・　操作しながら，自分なりの言葉で長い方を選んだ理由を伝えている。	・　基準となる物を使って，２本のひもの長さを測る方法を自分で導き出そうとしている。 ・　友達に長さを比較する方法を分かるように伝えたり，友達の考えを聞いたりしようとしている。

本時の個別目標と対応させて，評価基準を記述します。一文の中で評価する内容を絞っていると，どのような力を見ようとしているのかが分かりやすくなります。

毎時間，そのような評価を重ねることによって，その単元の学習を通して，どの段階の力が付いてきたかを明確に整理することにつながると考えています。毎時間の評価は，その場面で見られたエピソード記録のようになることもありますが，単元やある程度の期間を通して整理してみると，別の学習場面や生活の中で生かせる力になっているかどうかを考えやすくなると思います。

各教科は，どのような基準で段階別に示されているのでしょう。

各教科の内容は，学年ではなく，段階別に示されています。

それは，発達期における知的機能の障害が，同一学年であっても，個人差が大きく，個々の児童生徒の実態に即して，各教科の内容を精選して，効果的に指導することを求めているからです。

今回の改訂では，**各段階における育成を目指す資質・能力を明確にすることができるように，知的機能の障害の状態と適応行動の困難性等を踏まえ，各教科の各段階は，基本的には，知的発達，身体発育，運動発達，生活行動，社会性，職業能力，情緒面での発達等の状態を考慮して目標を定め，小学部１段階から高等部２段階へと７段階にわたり構成しています。**目標と内容は，基本的に，児童生徒の成長に応じて，**より深い理解や学習へと発展し，学習や生活を質的に高めていくことのできるように**，次のような段階を踏まえて配列されています。

＜各段階の目標＞

小学部			中学部		高等部	
小１段階	小２段階	小３段階	中１段階	中２段階	高１段階	高２段階
教師の直接的な援助を受けながら，児童が体験し，事物に気付き注意を向けたり，関心や興味をもったり，基本的な行動の一つ一つを着実に身に付けたりすること	教師からの言葉掛けによる援助を受けながら，目的をもった遊びや行動をとったり，児童が基本的な行動を身に付けたりすること	児童が自ら場面や順序などの様子に気付いたり，主体的に活動に取り組んだりしながら，社会生活につながる行動を身に付けること	生徒が自ら主体的に活動に取り組み，経験したことを活用したり順番を考えたりして，日常生活や社会生活の基礎を育てること	生徒が自ら主体的に活動に取り組み，目的に応じて選択したり処理したりするなど工夫し，将来の職業生活を見据えた力を身に付けられるようにしていくこと	生徒が自ら主体的に学び，卒業後の生活を見据えた基本的な生活習慣や社会性，職業能力等を身に付けられるようにしていくこと	生徒自らが主体的に学び，卒業後の実際の生活に必要な生活習慣，社会性及び職業能力等を習得すること

＜各段階の内容＞

小学部			中学部		高等部	
小１段階	小２段階	小３段階	中１段階	中２段階	高１段階	高２段階
知的障害の程度は，比較的重く，他人との意思の疎通に困難があり，日常生活を営むのにほぼ常時援助が必要である者を対象とした内容	他人との意思の疎通に困難があり，日常生活を営むのに頻繁に援助を必要とする者を対象とした内容	他人との意思の疎通や日常生活を営む際に困難さが見られ，適宜援助を必要とする者を対象とした内容	生活年齢に応じながら，経験の積み重ねを重視するとともに，他人との意思の疎通や日常生活への適応に困難が大きい生徒にも配慮した内容	生徒の日常生活や社会生活及び将来の職業生活の基礎を育てることをねらいとする内容	生活年齢に応じながら，卒業後の家庭生活，社会生活及び職業生活などの関連を考慮した，基礎的な内容	比較的障害の程度が軽度である生徒を対象として，卒業後の家庭生活，社会生活及び，職業生活などの関連を考慮した発展的な内容